『郷土的常識の意味』自序

ZHOU Xing
周 星

翻訳：宗暁蓮

本書『郷土的常識の意味』は、『郷土生活のロジック』（北京大学出版社、2011 年 4 月）に続く、わたしの学術論集である。両者は、どちらも、「人類学の視野における民俗研究」というサブタイトルをつけているが、このことからもわかるように、これらは同一の学術的コンテキストにある姉妹編である。わたしは、長年、文化人類学と民俗学の教育、調査と研究とに従事してきたが、文化人類学と民俗学を結びつけ融合させ、中国社会と文化を理解する学術的な探求のなかで、いくらかの個性的なスタイルの学術手法を形成しようと試みてきた。しかし、こうした探求の成果が如何なるものであるかは、志を同じくする人々の判断にゆだねるところである。過去の論文を整理して集めて出版することは、自分にとっては「温故知新」の機会であるが、これをきっかけに、人類学および民俗研究の先生方や友人、より広範な読者による検査とご助言を得る機会となれば幸いである。

本書は、上下篇あわせて全部で 16 篇の論考から成っており、これらは過去 20 年間に、異なる場所、異なる研究テーマ設定や問題意識のなかでそれぞれに執筆したものではあるが、全体として言えば、これらを「中国の土着的常識の意味」というテーマのもとでまとめることができるであろう。上篇の 8 本の論文は、ほぼ「生活文化のなかで改めて見出された当たり前」を理念としており、一般の人々の生活文化の日常のなかから、普段よく見知っていながら注意されていないが、実際には豊かで深い意味をもった民俗現象を通じて、その深く含蓄された意味を探ることを極力試みたものである。現代民俗学は、普通の人々の日常生活世界を研究対象としており、それは日常生活世界における「当たり前」とみなされがちな事実と現象の背後にある意味を追求し続けている。しかし、民俗学はしばしば自社会の、母語文化と密接に関連する多くの事象を探求しており、このため、日常生活世界に身を置く民俗学者自身は「生活者」として、多くの重要な事象に対して「自覚」が欠けていることがしばしば起こり得る。あるいは、自己の基準を押し通すがゆえにそれらを探求の必要がないものと決めつけがちである。このため、文化人類学の異文化の生活様式に詳細な観察と比較研究を進める特徴的な手法を借用する必要があり、文化人類学と民俗学とが相互に入り組み浸透することは、母語による研究者が、その自社会の母語文化研究を進める際に容易に起こりがちな死角をできるかぎり避けるために有用である。わたしのみるところ、文化人類学と民俗学はちょうど二つの光源（二つの皿に載せた灯）であり、それらは相互に相照らしあうことで、お互いが相手の光の届かないところを照らしあう関係であって、それゆえに、研究者は多くの認識と視野の限界を克服することができるようになるのである。

餃子や、「花饃」[訳注 1]、灯篭など、これら中国での日常生活では日常的に過ぎる食品やモノの多くの「常識」的な事象をめぐって、我々は確かに多くの新しい発見をすることができる。

それら多くの事象のなかには、人々の幸福感と価値観を蔵しており、一般の人々の気持ちの委託、切実な期待を含んでおり、そして、中国文化に内在する意味を含蓄している。目を見張る様々な、奇奇怪怪な実に多くの民俗事象の整理と配列、類比を通じて、我々は、人々がこれを用いて意義を育んできたメカニズム、心情を養ってきた叡智と生活を紡いできたロジックとを「発見」することができるのである。餃子を「民俗食品」とする儀礼化は、これが進むにつれて次第に「国民食品」という意味を備えてきているが、その継承には無数の人々の幸福な生活に対する体験と表象を載せている。農村の女性たちが「発明」した花饃と儀礼用花饃の文化は、農村コミュニティの「人情世古」に浸透している。フィールドで出会う花饃と儀礼用花饃は、一見したところ非常に素朴で、「野暮」ったくすらあるが、そのなかにあるこつや程合い、ルール、美的感覚などを深く掘り下げてゆくと、村落の人々の生活にある「小麦粉を蒸して作る食品を介したコミュニケーション」の当たり前に関わる奥深さをもっている。また「灯」と「丁」の有名なメタファーがあるように、これら文字のもつ音や作りをもじるメカニズムから生み出される文化的記号は中国全土に無数の生命力を象徴する儀礼を形成してきた。灯に関する習俗は、単にコミュニティの凝集をあらわす象徴であるだけではなく、中国文化の生命力に対する渇望を表現する現れでもある。中国の民俗的生活世界は、実際にはメタファーと象徴性に溢れた空間であり、江南の村落の調査を通じて、非常に多くのメタファーと象徴的な寓意がほとんどすべての物質的表現にみられることを「発見」することができるが、これら物質的象徴の多くの当たり前について、村人たちはよく見慣れていながらその眼には映っていない。

わたしはずっと「宇宙薬」という自分で作った概念に傾倒していて、長年、この概念を使って、中国文化と民衆生活が密接に関係している多くの独特な事象を括ることを試みてきた。それは、たとえば、身体と疾病の関係や、中国的宇宙論に基づき形成された民間療法から不老不死、若返りの薬の信仰、あるいは、言い伝えや伝説といったものである。今回、やっと2篇の論文を提出することができたので、ご笑覧いただければ幸いである。『山海経』と西王母の故事や、后羿（こうげい）と嫦娥（じょうが）の神話、始皇帝の東巡、武帝の西遊などはすべて、均しく「宇宙薬」の概念によって貫かれているが、もしわたしの想像力を少しはばたかせることが許されるのであれば、西北地域の崑崙（コンロン）山脈のふもとの「不死」の霊薬や、西南地域の彝（い）族や納（なし）西族の「不老不死の薬」の神話とをお互いに関連させることも可能だろう（訳注2）。「宇宙薬」は決して遠く隔たった上古の神話ではなく、異国他郷のアラビアンナイトの話だけではなく、それは実際に中国人の日常生活のなかに常に見受けられ、そして意外にも思われない当たり前の理念なのである。わたしはそれを示すために、かなりの紙面を中国の端午節をめぐる各種の薬の慣習の叙述と結論に割いたが、これは、この複雑な祝祭日に関して、屈原やドラゴンボートレース、詩の競争、粽といったより鮮烈な事象に阻まれるように、多くの場合、端午節の本来の意義が学者やメディアによって忘れさられているからである。改めて端午の節句の薬の慣習を整理してみると、やはり「宇宙薬」の概念を用いて斯くも多くの現象の背後にあるロジックを標準化することができる。そのなかでも、もっとも人々の興味をそそるのは、中国南方の多くの地域で端午の節句の薬市場に立ち込める「薬気」が、都市民によって「病気」、「毒気」、「邪気」と拮抗する形で想像されたり、用いられることすらあるということである。実に多くの端午の薬の習俗のなかで、読者もまた、聞き馴染み、かつ、よく親しんだ当たり前となっている中国の宇宙論を「発

見」することは難しくない。

「人間関係」は、中国の文化人類学者が永遠に興味を覚えるテーマであり、また、中国の社会と文化を理解するための重要な鍵である。わたしはかつて、フランスの人類学者であるレヴィ＝ストロースが提示した「生のものと火を通したもの」（「生／熟」）の命題から出発して、中国社会に普遍的に存在している「見知らぬ人／よく見知った人」（「生人／熟人」）の分類について分析と考察を進めた。そこでは、人々の日常生活の実践のなかでの大量の社交活動は、意識的にせよ、無意識的にせよほとんどみなこの分類から大きな影響を受けていることを指摘した。「見知らぬ人／よく見知った人」の分類は、あまりに「当たり前」すぎて、それゆえ、研究者によって真剣に検討されることが非常に難しいのだが、わたしの指摘したいのは、どのように（たとえば「よく知った人であれば物事をやりやすい」といった類の）この分類された人間関係あるいは常識的な経験を制限する、あるいは公共領域の外に隔てることができるかという問題であり、これはまさに現代市民社会がなぜ中国においては生まれ難いのかという中国の問題点である。中国社会の構造、とりわけ漢民族の親族関係と親族制度のもう一つの重要な人類学的テーマは「宗族モデル」であり、それが「出口」（林耀華[訳注3]）を経て方向を変えて「自家消費」（フリードマン[訳注4]）される神秘的なプロセスであり、これはすでに中国研究の古典的な手法となっているが、中国の人類学者である李霞氏は「実家／嫁ぎ先」関係の社会人類学的調査と研究とを経て、多くの面で「女性親族関係」に関する常識を改めて「発見」している。ここから、「女性親族関係」実践の意義を提示するに至ったが、これは間違いなく「宗族モデル」の大きな突破口である。わたしの評論は、この李霞氏の研究成果に系統だった解説を与えることを試みたものであり、同時に、私自身の思考を展開してもいる。あまりにありふれた、娘が嫁ぐこと、実家に帰ること、分家をめぐって揉めること、親族への挨拶めぐりをする事、嫁と姑の問題など、中国の普通の人々が人生のなかで無数のほぼ同じようで、それでいてそれぞれの内容を伴った物語は、今、確かにより学術的な解釈を獲得することが期待できるのである。

下巻は、8篇の論文で構成されており、これらもまたひとつの共通するテーマを形作っている。それはすなわち、「郷土的常識の継承と再生産」である。中国社会のこれらの当たり前さは、根深いものであり、これらを中国文化の伝統が自ら体系を為し、自ら継続するよりどころを得ているとみるにせよ、現代社会への転換過程を妨げているとみなすにせよ、それらはそこでは全く動じない存在感をみせている。「文化遺産」関連の意見表明が熱を帯びてやまない現在の中国において、土着の常識は、「伝承」という視野から見れば、決してわずかに残された「残存物」ではなく、現代中国社会の現実の基本的な事実の一部であり、疑いなく、将来の中国社会へと途絶えることなく連なってゆくものである。文化人類学と民俗学は、文化の往来の歴史の重要性を認めるものであり、それと同時に、文化伝統を現在の生活の知識の構成部分とみなすものでもある。民間信仰、あるいは、「民俗宗教」を例にとれば、多くの、見たところ「原始」的で、「古」そうな信仰の形態は、生き生きとしており、「文化遺産」の概念で概括できそうな人々の日常生活のなかにみいだされる儀式や信念であっても、実際には「現時点」での現代社会生活の基本的な状況から把握し、理解すべきである。もし深く研究を進めるならば、「文化遺産」のレッテルは、ときに、人々の信仰生活が自らの合法性と正当性のため、意識形態の妨害を回避するためにすぎないものであり、自らを継続し再生産することができるような新たな道を進

んでいることを容易に見出すことになるだろう。

ここで、私たちは視線をミャオ族の「村落博物館」へと向けてみよう。そこの村人たちは、グローバリゼーションを背景とする観光産業開発の大波が押し寄せてきた際に、知恵にみちたやり方で新たに生活を配置し、しだいに新たな「日常」を形成していった。彼らは、土着のコミュニティの生活文化を観光客に「見せてよい」部分と、観光客には「見せない」部分へと割り振り、それによってすでに外部の権力がもたらした変動に適応し、あるいはそれを消化し、上手に生活秩序を維持した。陶磁器は、かつて中国古代の最も輝かしい文化産業であったが、長きにわたって、「民間の窯」は「官製の窯」と同様のあるべき評価を受けてこなかった。中国の人類学者である方李莉氏による、景徳鎮の民間窯の事例研究の評論のなかで、わたしは「民間窯」を重視する問題意識について深く同感を覚えた。景徳鎮の民間窯はけっして陶磁器文化史だけの問題にとどまらず、それは、陶磁器の「文化叢」（訳注5）およびその伝統が現在の景徳鎮社会において実際に存在する研究テーマなのである。喜ばしいことに、景徳鎮において、新しい民間窯は陶磁器業界の伝統的な技術と慣行を継承するだけでなく、ポストモダンの文化的環境のなかで新たな方向を模索しつづけている。広大な面積を持つ中国にあって、文化の地域的特徴は非常に際立っており、文化人類学と民俗学は、確かに「ローカルノレッジ」の研究に長けている。景徳鎮のような突出した地方文化産業がない地域においても、「地方性伝統」はやはり重要な文化的資源であり、それは土着の常識的な知識によって発展の基礎を支えている。たとえば、福建省一帯の、改革開放以来の発展は、まさにこの地域のもつ徹底した成功への執着、出国や経済活動領域への進出を辞さない地方的伝統に立脚しているのである。

改革開放の時期になり、中国社会が「非常」事態から「正常」へと回復した外面にあらわれたしるしは、いうまでもなく、かつて抑圧され卑しめられた常識の再生に他ならない。それは、取り除かれたというよりも、ただ潜んでいたというべきだろう。革命の時代に沸き起こった代表的な新事物である「農民画」は、もともとは政治運動の「子供」であったが、それがどのような意識形態であったかに関わらず、農村の人々の常識は、依然としてそのなかに沁みわたっている（訳注6）。農村の人々にとって、実り豊かな収穫は変わらぬ夢であり、労働は永遠の美徳であり、農業集団化時代の農民画はそのままこうした感情と期待を内包していた。現代芸術の「伝統」としての農民画は、最終的には民間絵画あるいは民俗芸術の新たな定義へと向かうモノではあるが、その意味するところは郷土の知識に対する帰依である。すなわち、農民画は、地域的な農村生活および民俗の様子を描く点を売りにしているが、それは同時に郷土の知識の新たな創造をも意味している。国家は民間社会の改変に力を注ぐが、同時にまた積極的に郷土知識を利用する。これは、多くの状況下において、郷土知識は中国の記号へと昇華可能だからである。2008年に北京オリンピックの開幕式で意図されたのは、国家プロジェクトによる「中国のイメージ化」であったが、数多の中国の記号がその中に用いられ、中国的な「儀式政治」の演出を支えた。シンボリズムをめぐる論争はすぐには終結しないだろうが、それらの郷土的知識に基づいた中国の記号も強固に、世界に向けて自身を示し続けてゆくことになろう。伝統と日常的な知識はいったん出来上がってしまうと変わらないように見えるが、国家レベルでも、草の根の人々の日常生活のレベルでも、人々の文化実践もまた、いつまでも休むことなく日常的知識を上書きしてゆく。かつての歴史の記憶が再び呼び起される際には、表面的には「復古」

にみえる漢服も、かえって現代の新たな創作物である。漢服の「美」は、若い世代の人々に着られるという実践によって新たな意味を見出され、これは郷土の審美意識の再認識と再構造化を意味するだけでなく、実際には、私たちの「中国式服装」に関する既存の常識を新たに書き直しつつある。

上述のように、民俗学は郷土の社会と母語文化の地方性知識の研究に力を注ぐのだが、研究者はしばしば「自身が山中にいるために」「廬山の真の姿を知らない」（わが身をその渦中に置いているがために、それを全面的に観察することができない）ことになりがちである。そこで、文化人類学の研究視野を借用することで、郷土の日常的な生活様式の細かい点についてまで詳細な観察をすすめ、かなり容易に母語文化の同化性による遮断を乗り越えて、多くの当たり前で目に入りつつも見ていない知識に向き合うこととなる。このプロセスは、まさに費孝通教授が示したように、あるいは民俗学者の「文化自覚」と言えるかもしれないが、我々の生活は、郷土的な当たり前の知識という「フィールド」のなかにあるということであり、いくらかの自覚を要するところでもある。本書に収めたそれぞれの論文の多くは、わたしが文化人類学と民俗学という二つの学問領域の思考方法を共に学んだことで獲得した収穫である。わたしは、自分自身もまたそのなかの日常生活に身を置く者であることについて、また、自分自身も長きにわたってそのなかの郷土的知識の意味に身を浸してきた者であるということについて、いくらかの「発見」と内省的探求を進めるよう努めてきた。「捗々しくない成果でも隠し立てできない」（「醜い妻は夫の母に会うことを恐れない」）という。わたしのこれらの試行的な努力がうまくいっているかどうか、価値があるかどうかは、学術界の同業の人々と多くの読者の御叱正を待つところである。

2014 年 1 月 30 日
愛知大学名古屋キャンパスの研究室にて
周星

目次

上篇　在生活文化中重新発現常識
餃子：民俗食品、礼儀食品与「国民食品」
陝西韓城市党家村的花饃、礼饃及「蒸食往来」
灯与丁：諧音象徴、儀式与隠喩
桃村：物態象徴的民俗世界
中国古代神話里的「宇宙薬」
端午節和「宇宙薬」
人的「生 / 熟」分類与漢人社会的人際関係
婦女親属関係的「発現」与婦女親属関係実践的意義

下編　郷土常識的伝承与再生産

従「伝承」的角度理解文化遺産
民間信仰与文化遺産
「村寨博物館」：民俗文化展示的突破与問題
器物、技術、伝承与文化
地方伝統与閩南発展
従宣伝画到旅遊商品－戸県農民画：一種芸術「伝統」的創造与再生産
北京奥運開幕式与「印象中国」
漢服之「美」的建構実践与再生産
後記 / 謝辞

訳注１　主に中国北部、西北部の漢民族地域でみられる冠婚葬祭、年中行事の儀礼の際に用いる、小麦を加工したマントウ。老人の還暦祝いに送る桃を模したもの、子供の記念行事に送る虎や龍、鳳凰を模したものなど造形、色彩は多様である。一部は、国家級無形文化遺産に登録され、上海万博でも展示された。

訳注２　『山海経』の不死樹、西王母の仙桃、太陽を射落とした英雄后羿とその妻の嫦娥をめぐる不老不死の薬、始皇帝が東方に不老不死の霊薬を求めて徐福らを遣わす故事、西王母から仙桃を賜る前漢の武帝などここに挙げられた著名な故事は、すべて不老不死をキーワードとしている。

訳注３　中国を代表する人類学者のひとり。1910年生まれ、2000年没。燕京大学で修士号を獲得し、1940年にハーバード大学で博士号を取得。小説的体裁を用いて描かれた『The Golden Wing: A Sociological Study of Chinese Family』（1947）は、中国の宗族、家族研究の基本文献となっている。

訳注４　Maurice Freedmanはイギリスの社会人類学者。1920年生まれ、1975年没。中国社会における宗族のモデル化、文献資料を取り込み、中国学、歴史学との協働作業の提案など学際的な中国研究においても大きな功績をのこした。『中国の宗族と社会』（1987年日本語訳）、『東南中国の宗族組織』（1991年日本語訳、いずれも弘文堂）などは、現在の宗族研究においても基本文献となっている。

訳注５　Culture Complexの訳語。現在の中国文化研究においては、文化類型における文化複合の意味ではなく、機能的側面において、相互に関係しあい形成される、おもに人間の活動を介して、物質文化と無形文化を結合するような文化の集合結合体を指す。

訳注６　1950年代から1970年代にかけての農村における政治運動のなかで誕生したプロパガンダ・アートが新たな意味を獲得したもの。特徴的な色彩とならんで、農村の風景、とくに豊かな収穫や望ましい人間関係などを題材とする点に特徴がある。詳しくは周星「農民画という「アート」の創生―プロパガンダから観光商品へ」（『中国社会における文化変容の諸相:グローカル化の視点から』韓敏（編）、風響社、2015年）を参照されたい。